

カール禿頭王は本当に禿げていたか

著者	赤阪 俊一
雑誌名	埼玉学園大学紀要．人間学部篇
巻	12
ページ	65-77
発行年	2012-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000369/



カール禿頭王は本当に禿げていたか

Was Charles the Bald Really Bald?

赤 阪 俊 一

AKASAKA, Shunichi

はじめに

ラインハルト・レーベが『カール禿頭王は本当に禿げていたか』¹⁾という本を書いている。本稿のタイトルは、この本のタイトルを借用したものである。実のところレーベの本ではカール禿頭王について触れているところはわずか数頁ほどにすぎず、その内容にしても、生まれた時に領土がなかったのでハゲ王と呼ばれたという説——イングランドのジョン欠地王と同様の理由である——を切っ捨て、²⁾ 10歳の時にプリュム修道院に送られて剃髪されたので、後年、ハゲ王と呼ばれるようになったという説についても、今となつてはその証拠がないと否定して見せ、³⁾ けっきょく、打ち続く争いの間にどんどん髪が抜けて、本当に禿げてしまったのだという、面白味のない結論を出している。⁴⁾ 面白味がなくともそれが真実であれば、否定しようがないのであるが、その結論がそう確実なものでもないのである。レーベが証拠にあげているフクバルトによるカールのハゲ礼賛の韻文詩にしても、⁵⁾ 聖職者のトンスラ礼賛のようであるし、それに国王が禿げているからといって、そのハゲを礼賛して国王にささげる詩を書くというのも現代ではなかなか理解しづら

い。なによりも不思議なのは、ハゲ王という添え名以外、彼が禿げていたことを証明する史料がないのである。カール研究の第一人者であるジャネット・ネルソンなどは、彼が禿げていたのではなく髪をもっていたと言い切っている。⁶⁾ もちろんそれにも証拠はない。しかし、彼が祖父のカール大帝似であったとされていることからしておそらく禿げてはいなかったと言いたかったようだ。ちなみにカール大帝の容姿については、アインハルトが詳しく説明してくれているが、髪については、わざわざ「白髪は美しく」⁷⁾と書いているので、豊富な髪に恵まれていたようだ。ではカール禿頭王は禿げていなかったのに、ハゲ王と呼ばれたのであろうか。

だいたいこのハゲ王と呼ばれるようになったのがいつ頃のことか実のところよくわからない。もしカールが存命中にこのように呼ばれていることを知ったら、彼はどのように感じたであろうか。現代人と同じメンタリティをもっておれば激怒したであろうが、当時ではどうであったか。本稿はカールのハゲ頭を材料としながら、ヨーロッパ中世社会において頭髪が有していた意味について考えてみる試みである。

キーワード：カール禿頭王、ハゲ、トンスラ、男性性
Key words : Charles the Bald, baldness, tonsure, masculinity

1 長髪之王たち

一般的に言って、ギリシア人やローマ人は長髪が蛮族に典型的であったとみなしていた。それゆえカエサルによって征服され、新しく属州となったガリアはやがて長髪のガリア Gallia Comataと呼ばれるようになる。⁸⁾ フランク人も例外ではなく長髪であったようである。ただし王族とその臣下の間で頭髪の長さが違っていただうかに関しては見解の相違がある。オアウは、すべてのフランク人たちはおそらく下層大衆を除いて髪を伸ばしており、したがって王はその長さにおいて臣下とかわらなかったと言う。⁹⁾ しかし実際のところメロヴィング朝の国王たちは特に長い髪を蓄えており、その長さにおいて臣下とは一線を画していたようなのである。それを証する事実がグレゴリウスの『歴史』に豊富に見取ることができる。たとえば自らを王と名乗ったグンドバルドゥスという人物を紹介するのにグレゴリウスは「フランクの王族として髪を束ねて背中にたらしめていた」と表現する。¹⁰⁾ また次のようなエピソードも紹介されている。殺されて川床に沈められた王の息子、クロドヴェクスの死体がたまたまある男のやなの中に入った。この男は、それが誰だかわからなかったが、長く伸びた髪から、王族の一員だとわかったと語る。¹¹⁾ もうひとつのエピソードでは死んだ兄王の息子たちが祖母に可愛がられているのを見た弟たちが画策して、兄王の子どもたちの「髪を切り落として、彼らを一般民に」¹²⁾ しようとする。この時には、けっきょくこの子どもたちは殺されてしまうのだが、その顛末は後に紹介する。それも髪にかかわるものである。これらからすれば、一般民は短い髪をしていたのであり、王

族は特に長い髪をしていたと一般的に知られていたようなのだ。またビザンツの歴史家アガティアスに次のような文章がある。

そして彼が倒れた時、ブルグント人たちは彼の髪が流れるように豊富であり、背中へと垂れ下がっているのを見て、すぐに彼らが敵の指導者を殺したのを見て取った。というのはフランクの国王たちにとっては髪を切らないのが決まりであったからである。それどころか彼らの髪は子どものころより決して切られず、ふさふさと肩に垂れ下がっていたのだ。彼らの前髪は額のところで分けられ、左右へと垂れていた。・・・中略・・・彼らの臣下は自分の髪を切りそろえ、さらに長く伸ばすことを許されてはいない。¹³⁾

以上からすると、オアウの主張とは違って、メロヴィングの王たちは長髪を蓄え、臣下は、それよりも短い髪形であったようなのだ。さて、では、メロヴィングの王たちはどうしてこのように長い髪を蓄えていたのであろうか。この髪はいったい何を意味していたのだろうか。メロヴィングの王たちの髪に関してさまざまな解釈がなされている。マルク・ブロックは長髪が本来は超自然的な身分の象徴だったと言うし、¹⁴⁾ エルンスト・パーシー・シュラムは、原始的呪術的な観念のシンボルだと言う。¹⁵⁾ カウフマンは、古ゲルマンの呪術的な国王ハイルと結び付けて考えようとする。¹⁶⁾ ワルラス・ハドリルはもっとも常識的に社会的な身分と呪術的特性がその長い髪によってシンボル化されていたと言う。¹⁷⁾

聖なる力と長髪を結びつけることを拒否する研究者もいる。フランク人たちは首領のスンノンの死後、首領マルドミールの息子ファ

ラムンドを選んで、彼らの王とした。彼の後継者がクロディオであり、その時以後、王の長髪が決まりになったようだと、ディーゼンベルガーは推測する。¹⁸⁾つまり長髪はそう古いころからの習慣ではないと言うのだ。さらにクローヴィスの洗礼の時にも、髪の手は、ほとんど何の役割も演じてはいないので、同時代人にとっては、メロヴィング王家の長髪は聖なる状況とは結び付けられてはいなかったとディーゼンベルガーは考える。¹⁹⁾その証拠に、聖者の頭髪の場合と違って、メロヴィング王家の人たちに関して、切られた頭髪の扱いについてはなにも報告されていないという点を挙げる。さらに頭髪が持っていたという呪術的な力についても再検討する必要があるとして、頭髪と呪術的な力との結びつきすら否定しようとする。しかしこれは首肯しがたい。長髪は当時の人にとっては聖なる文脈では考えられてはいなかったかもしれないが、しかしメロヴィングの王族は長髪を維持し、それ以外には長髪を許さなかったというアガディアスの報告を信じるとすれば、明らかにメロヴィングの支配者は長髪がある種の利用可能な機能を有していたことを知っていた。そしてそれは呪術的な力が頭髪に宿っているというメンタリティを当時の人々が共有していたからということ以外には考えられない。ただしメロヴィングの王族が積極的に長髪政策を押し出したのは、また別の理由からであった。それは初期のフランク人たちがローマ人と戦いながら、まだローマ文化が優勢であったガリアに建国したと無関係ではない。²⁰⁾忘れてならないのは、ローマ人たちが短髪をよしとしていたことであり、ゲルマン族の長髪を軽蔑していたこと、さらにローマ人への服従のシンボルが短髪にすることで

あったことである。

ガリアに定住したフランク人が、人数的に多数を占めるローマ人の中で、また圧倒的に優位にあったローマ文化の中で、ゲルマン人としての矜持を維持するためにはどうすればよかったか。そしてその矜持を常に目に見えるようにしておくための方策はなんであったか。かつての古き良き習慣どおり長髪にしておくこと以外、適切な手段はなかなか思いつけない。つまりメロヴィング王家の長髪は、ローマ化を阻止するための防波堤の役割を果たしていたのだ。²¹⁾しかし頭髪そのものにかなる呪術的な力も宿っていなかったとしたら、このように頭髪を利用するのは可能であっただろうか。ディーゼンベルガーの言うように、当時頭髪は聖なるものとは結び付けて考えられてはいなかったかもしれないが、しかし髪自体に呪術的な力が宿っているとメロヴィング朝の人びとは信じていたがゆえに、髪を切ることによって、権力の座から遠ざけることが可能であると考えたのではないか。このような例はグレゴリウスにいくつか見られる。髪自体に呪術的な力があれば、それが多いほうが、つまり長髪のほうが力が大きくなるであろうし、それゆえ臣下に長髪を許さなかったということにも納得がゆく。そして敵対者に対しても髪を切っただけで事足りると考えていたことも納得される。頭髪を切られただけではなく、殺されてしまったカラリクスの場合、その息子が、「緑の木であれば、たとえ葉を刈り取られようとも、決して干からびはしない」という言葉を吐き、それを聞いたクローヴィスが「彼らが毛を伸ばして自分を殺そうとしていることを悟って」二人の首を刎ねさせたのだ。²²⁾もしカラリクスの息子がこういう言葉を口にしなかったら、彼ら

はおそらく髪を切られただけで済んだであろう。ことほどきようにメロヴィング期には髪が重視されていたのだ。そしてそうであったがゆえに、ローマ文化に対抗してのフランク人のアイデンティティ維持のための役割をこの長髪が果たすことができたのであろう。

2 短髪の王たち

先にビザンツの歴史家、アガティアスの引用を紹介しておいた。それによると、メロヴィングの王たちは、臣下に長い髪を許さなかったとある。してみると、いかに権勢を誇っていたとしても、宮宰にすぎないカロリング家の先祖たちは、おそらく短髪であったと想像される。ではピピンが751年にメロヴィング家のキルデリク3世に代わって、フランクの唯一の王となった時、彼は長髪にしたのであろうか。実はそうではなかった。彼は短髪のままであった。カロリングの王で、長髪は誰もいない。²³⁾ すべて短髪である。どうしてそういうことになったのであろうか。まずカロリングの時代、長髪はどのように見られていたかを、アインハルトを通して想像してみたい。アインハルトは、その『カール大帝伝』で最後のメロヴィング王について次のような記述を残している。

王はただこう振舞う以外にどうすることもできなかった。つまり王はその名称だけで満足し、髪をのばし髭をたらし、玉座に居座って支配者らしくよそおい、どの国からであろうと訪れた使節に謁見し、帰っていくときは、あたかも自己の権限からそうしているかのよう、じっさいは言い含められた、いや命じられた返答すら、与えていたにすぎない。²⁴⁾

この戯画的なメロヴィング王の姿からは、フランク初期のローマ人に対する矜持など読み取れない。長髪は王者としてのよそおいの一環としてみられているだけである。これはもちろん8世紀という時代のせいなのだ。8世紀にはローマ化を恐れる必要などなかった。むしろローマ文化の復興こそ望ましいものであった。そうであれば、短髪をよしとするローマ人の価値観を姿に現しても何の問題もない。むしろローマ人の価値観を外面化することこそ、王者のたしなみであった。それにクローヴィスがキリスト教に改宗したとしても、彼以後のメロヴィング朝の王と教会の間には、有機的な結びつきがあまり見られない。トゥールのグレゴリウスを読むと、メロヴィングの王たちは、聖職者たちを自分の部下であるかのように扱っていたようなのだ。あるいは修道院は反乱した王族を監禁しておくところであり、敵対した王族の髪を切って、トンスラにし修道士にすることは、囚人として監禁しておくことだと観念されていたようなのだ。²⁵⁾ ところがカロリング朝の王たちは、教皇の塗油を受けて王となった。つまりカロリングの王はその権威を教会に十全に保障してもらえるのに、メロヴィングの王にはそのような保証は与えられてはいない。権威の象徴として呪術力を秘めていたと人々に信じられていた長髪を使用せざるを得なかったのである。しかし髪が呪術的な力を失ってしまったとき、長髪は、もし多くの人が権威の象徴として認めれば、権威の象徴でありうるが、そうでなければ、ただの長い髪にすぎない。すでにして9世紀初めにラバヌス・マウルスが頭髪の中に力が宿っていると考えerことは誤りだと断言している。²⁶⁾ アインハルトが描いているのは、そのような髪のあるようなの

だ。ダットンが言うように、カロリング期には髪に力があるという考えを人々は放棄してしまったようなのだ。²⁷⁾

さきにメロヴィング朝の政策がローマ文化と距離を取ることであったことを指摘したが、カロリング朝は、逆に意識的にキリスト教的ローマ帝国と自らを結び付けようとし、支配者たちはローマ帝国の皇帝権威との直接的連続を主張したことが、貨幣の図柄から見て取れる。²⁸⁾

さてではカロリング家の人たちは、髪の高さを自覚的に短くしたのであろうか。これについてははっきりとはわからないが、生まれた時から髪を切らなかったというメロヴィング王家の人たちとは違って、ピピンは髪を切ることに對して特別な感慨をもってはいなかったことが、次のような記録から推測できる。パウルス・ディアコヌスによる『ランゴバルト人の歴史』第6巻の53章に述べられている記事である。

そのころ、フランク人たちの支配者カールがその息子のピピンをリウトプラントのもとに送り、リウトプラントは習慣に従ってピピンの髪を受け入れた。そして王は、その髪を切って、彼の父となり、王からの多くの贈り物でいっぱいにして彼を父のもとに送り届けた。²⁹⁾

これは髪切りを媒介にしての一種の同盟関係構築の試みであるが、重要なのは、ピピンもカール・マルテルも髪を切ることにまったく逡巡している様子がないことである。髪への授受は、同盟関係を象徴するものであり、髪自体になんらかの力があつたとしても、その髪に対する特別な思い入れはなさそうである。

ピピン一門の祖、ピピン1世はアウストラシアで宮宰として権勢を誇つたが、その息子、グリモアルドは自分の息子をアウストラシアの王、シギベルト3世の養子にすることに成功した。そしてシギベルトが656年に死去した時、その息子のダゴベルトはアイルランドに追放され、養子の方がキルデベルト養子王として即位した。³⁰⁾しかしこのキルデベルト養子王が662年に死去した後、残念ながら、ピピン一門は権力から遠ざけられることになった。乗っ取りは失敗に終わったのだ。以後、乗っ取りの試みはおこなわれない。彼らは常に宮宰として王を補佐しながら、実質的に権力を掌握するようになるのである。長髪の王を、短髪の宮宰が補佐し、王の長髪の権威を利用して、アウストラシア全体を支配した。室町期における征夷大將軍と天皇の関係を思わせる支配である。日本の場合、政治の実権保持者が天皇を廃しえなかったのは、それに代わる権威が存在しなかったためであり、成功はしなかったものの足利義満が天皇に代わり得ると考えたのは、中国の皇帝という権威が存在したためである。しかしピピン一門が長髪の王に取って代わり得るためにどうしても必要であつた外部の権威は、7世紀にはまだ存在してはいなかった。あるいはまだピピン一門と教皇とは結びついていなかった。カロリング家がメロヴィング家に代わりえたのは、教皇と結びついたためであるが、それがどのようになされていくのか、まだ7世紀段階でははっきりしていない。

長髪の国王になり代わらず、短髪の宮宰が支配するという、いわば権威を長髪者が主張し、権力を短髪者が行使するという政策は、もしかしたらピピン短軀王の時にはすでにシステムとして完成していたのかもしれない。

そうであれば、ピピンの添え名である「小さい」は、ダットンが示唆するようにもしかしたら、髪が「短い」ことであったかもしれない。³¹⁾ ピピンが短軀と呼ばれるようになったのは、後年、カール大帝の息子の「侏儒でせむしのピピヌス」³²⁾ と混同されたためであったかもしれないし、あるいはノトケルスが紹介するライオン退治事件があったからだとも言われている。しかしこの事件を記すノトケルスは、ピピンが小柄であったとは一言も述べていないのである。³³⁾ 長い間長髪の王が続いた後、初めて短髪のピピンが王になったため、Pipinus Brevis (Pipin the Short) と呼ばれたのではなかったか。もしそうであれば、以後は、ピピン短軀王と訳すのではなく、ピピン短髪王と訳すべきではないだろうか。

3 カール禿頭王は禿げていたか

さてカール禿頭王のはなしである。フランクの国王は、メロヴィング朝時代には、全員が長髪であり、カロリング朝時代には全員が短髪である。もし短髪が趣味の問題であれば、カロリング朝期にひとりぐらいは長髪にしてもいいのに、誰も長髪にはしない。おそらくメロヴィング朝時代との決別を自覚的に髪型において明確にしていたのであろう。さらにカロリング朝の国王が描かれるとき、必ず王冠を付けた姿が描かれる。³⁴⁾ これもおそらく自覚的にそのように描かせたのであろう。茨の冠をかぶせられたキリストに似せたのかもしれない。それであれば、短髪政策はもしかしたらピピンの二人の顧問、ボニファティウスとサン・ドゥニのフルラドが聖職者であったことと関係があるかもしれない。この二人が長髪に対してどのような見解を持っていたかははっきりしないが、ボニファティウスの

直接の後継者であるアルクインは断固たる長髪反対者であった。³⁵⁾ さらに言えば、このボニファティウスとフルラドはトンスラ姿であっただろう。そしてこのトンスラは、ペテロに由来すると言われるコロナ型であっただろう。つまり頭頂部を剃って、頭の周りに冠のように髪を残す周知のトンスラの型である。この型は、7世紀に一般化し始めたが、³⁶⁾ これはちょうどピピン一門が勢力を伸ばし始めた時期に一致する。ピピン一門の人々は、自分たちの隆盛とコロナ型トンスラの普及を神の運命と感じていたのかもしれない。してみると、カロリングの国王が必ず王冠をかぶった姿をしていたのは、これは俗人におけるトンスラへの対応形態であったのではなかったか。

長髪であれ、短髪であれ、王冠をトンスラのコロナ型頭髪にたとえることは可能であるが、しかし長髪の場合、コロナ型トンスラとの類似性は少ない。王冠がトンスラとの類似で見られていると考えるなら、髪の毛は少なければ少ないほどいいということになる。そしてその理想形態は丸ハゲということになる。丸ハゲに冠をかぶれば、ちょうど聖職者のトンスラと同じ形になるではないか。先にフクバルトのハゲ礼賛を聖職者礼賛だと書いたが、これは実際のハゲを礼賛していたのではなく、トンスラ礼賛と考えれば、そしてフクバルトがカールを讃えるためにこれを書いたとすれば、カールがハゲではなくとも、十分にカールを誉めていることになる。トンスラにするために頭頂部を剃っている聖職者と、短髪にし王冠をかぶっているカールを対応させて、聖職者の頭頂部を礼賛することによって、カールを称賛するという手法をとっているだけのことなのだ。そうであればカールが禿げ

ている必要などない。なによりもカールが禿げていなかった証拠がひとつ残されている。カールについて描かれた図である。³⁷⁾ この絵をよく見ると、王冠の下に短髪がきっちりと描かれているのである。

しかし今まで書いてきたのはすべて推測であり、この図にしても、もちろんカールの真実を描いているとは限らない。それに869年には書かれていたと思われる。『フランクの王たちの系譜』には、Korolus Caluus (Charles the Bald) という呼称が皮肉でなく単なる事実として記されているそうである。³⁸⁾ しかしカールに敵対していた人たちが、カールの生前、彼のハゲをあざけた記事はまったく見つかからない。このことは、カールが禿げていなかったか、当時、ハゲであることには、取り立てて問題とするようなからかい、あるいは揶揄の観念は付着していなかったかのどちらかであることを意味する。しかしハゲであることにそのような観念が付着していなかったとすれば、もちろんトンスラなどありはしない。のちに見るようにトンスラはあえて自らを落とすための工夫であるからである。それゆえ筆者としては前者であると考えたいのだが、残念ながら、もちろんそう断定する確たる証拠はない。

4 トンスラ

カールのハゲをトンスラと関連付けてみたが、さて、では、トンスラにはいったいどんな意味があったのか。頭髪を問題とする本稿では、トンスラを避けては通れない。というのも頭髪に加えられる行為は社会的な意味づけを示すものであり、この行為の区別はつまるところ頭髪を短く刈り込むか、あるいは長くのばすかというふたつしかないからである。

そしてトンスラとはこの短く刈り込む行為の究極にあるものなのである。したがってトンスラを考えるときには、常に長髪を対比的に念頭に置いておかねばならないはずである。

トンスラについては二段階で考えねばならない。次第にトンスラが普及する中世初期と全聖職者にトンスラが強制される13世紀以後の二段階である。その最初の段階では、聖職者たちは自分たちのアイデンティティをいかにして確立するのかを考え、その手段のひとつとしてトンスラを見ていたにちがいない。言い換えれば頭髪があることと対比させて、頭髪がないことを積極的に聖職者のしるしとしようとする意志が存在したのだ。カール・マルテルの同時代人、尊者ベアダは、その『教会史』の中で、①トンスラにする行動が、俗人身分から聖職者身分への移行を象徴化していること、②トンスラが服装よりも明確に聖職者を俗人から区別するしるしであることを、トンスラの意味として挙げている。ここには俗人身分とは区別されるべきしるしとしてのトンスラを通しての聖職者のアイデンティティ構築の意志が見て取れる。

しかし13世紀以後の聖職者においてはすでにトンスラであることが聖職者であることの前提となってしまう。アイデンティティ確立の手段ではなく、むしろ俗人と差異化されているその頭髪の状態をいかに納得するかが問題となっているのだ。そこで積極的に押し出されるのが、髪を剃っていると清潔であるとか、神との間に隔てがなくなるとか、要するに頭髪のないことを正当化する論理なのである。

トンスラがすでに聖職者であるための前提となっていた時代の聖職者として、ここではヤコブス・デ・ヴォラギネを取り上げてみよ

う。彼が『黄金伝説』の中でトンスラに関して詳しく述べてくれているからである。

ヤコブス・デ・ヴォラギネによると、トンスラの始まりは、ペテロに由来するのだそうである。『黄金伝説』には次のような記述が見える。

聖ペテロがアンティオケイアで説教していたとき、人びとがキリストの聖名を侮辱し嘲笑するために彼の頭のてっぺんの髪を切り落としたことがあった。以後、すべての司祭が中剃りするようになり、キリストの聖名のゆえに使徒たちの王者にたいして侮辱としてなされたことが、すべての司祭にたいして榮譽のしるしとしてなされることになったのである。³⁹⁾

ペテロからトンスラが始まるというのだが、では、このトンスラにはどれほど積極的な理由が付与されているのか。ヤコブスによると、剃髪すると、清潔さが維持できるし、不恰好になると言う。不恰好さが、一切の虚飾を排することを象徴的に示してくれるのだそうである。この不恰好ということだが、これはトンスラの型が不恰好なのか、あるいは剃っていて頭髪がないこと自体、つまりハゲていることが不恰好なのか、そのあたりは明確ではない。また髪を剃ることは頭を素裸にすることであり、これは司祭が介在物なく直接的に神と合一することを可能にしてくれるというのが、ヤコブスの説明である。

中世初期にはおそらくそのようには考えられなかったであろう。聖職者のアイデンティティを確立するうえで頭髪を剃ることに考え至ったのは、その当時の俗界の人々が頭髪に大きな意味を認めており、それを剃ることは、俗界の人々が重視していることを無化、ある

いは転倒させることになる意識したからであり、それによって俗人とは異なるアイデンティティを構築することができると考えたからであろう。したがって、中世初期のトンスラを考えるためには、当時の人々が頭髪に関してどのような意味を与えていたかを考えねばならない。

彼らが頭髪に関して感じていたことは、おそらく我々とは違っていたであろう。しかしそれは彼らが聖書に拠っていたが、我々はそのではないという意味で異なっていたのではない。聖書にはトンスラ自体についての記述などないし、なによりも頭髪に関しては、かなり矛盾する記述が含まれているからである。彼らは聖書を恣意的に利用して、自分たちに都合がいいように根拠づけただけなのだ。

有名なサムソンの話では、彼は頭にかみそりを当てたことがなく、髪に力が宿っていることになっている。⁴⁰⁾ ということは、長い髪が理想だということになる。ところがエレミアには、長い髪を切り、それを捨てよと神が命じるのだ。⁴¹⁾ レヴィ記では頭髪の一部を剃るのが禁じられているのに、⁴²⁾ ミカ書では神は逆に髪の毛を剃りおとせと命じるのだ。⁴³⁾ コリント人への手紙では、パウロが、男にとって長い髪は不名誉と述べている。⁴⁴⁾ このように矛盾した記述を見ると、神が髪に対して首尾一貫した考えをもっていたとは言い難い。要するに、トンスラにしなければいけないという理由は聖書には見つけられないのである。聖書には積極的にハゲになれという命令はまったく存在しないからである。したがって当時の人たちは事実上の習慣として蓄えられてきた長髪とどう対峙するかということで、トンスラを考えたであろう。

さて、では中世初期にはどのような理路で

髪を失うことを、積極的なアイデンティティの手段としえたのか。それを考えるためには髪を失うことが、当時の人にとって、どのような観念でとらえられていたのかを見なければならぬ。

中世の初期については、髪に対する執着は比較的わかりやすい。メロヴィング朝の長髪の王たちは、おそらく古来より髪に対して感じられてきた呪術的な畏怖の念を利用しつつ、長髪を権威の源にしたことは先にも述べておいた。ここで興味深い例を出しておこう。トゥールのグレゴリウスが紹介している少々衝撃的なはなしである。

クローヴィスの妻であった女王クロティルドには、クロドミール、キルデベルト、クロタルの3人の息子がいた。そのうち、クロドミールは早く死に、その息子たちは祖母であるクロティルドが手元において育てることになった。キルデベルトは母が、その孫を愛して、孫に王国を譲るのではないかと恐れ、弟に使いを送って、「われらの母は兄の子たちを育てて彼らに王国をまかせるつもりだ。急ぎパリに来てほしい。そこで一緒に相談して彼らをどうするべきかを処理せねばならない。彼らの長髪を切り落として彼らを一般民とするか、彼らを殺して兄の領土を我々の間で半分ずつわけるか」と言わせた。この二人は策を巡らせて、甥たちを自分たちのもとへと送らせ、その後使者に鋏と抜身の剣を持たせて母親のもとに送った。この使者は、鋏と剣のどちらを取るかを女王クロティルドに迫った。女王は、最終的に剣を選択した。その結果、子どもたちは殺されることになったとグレゴリウスが報告してくれている。⁴⁵⁾

グレゴリウスはローマの教養を備えた知識人なので、もちろん長髪を軽蔑的に見ていた

だろうし、そういう長髪を守ろうとするクロティルドは正気を失っていたと書き、彼女が混乱していたため誤った選択をしたと暗にほめかしている。しかし女王が剣を選んだのは事実だし、それほど髪が重要であったと考えられていたことは確かなようなのだ。しかし髪が命より重要だなどは現代人にも考えられないので、オワウは、鋏が意味しているのは、髪の手を切るのではなく、頭の皮をはぐことであり、要するに、どちらも死を意味していたので、楽な死として、女王は剣を選んだのだと主張する。⁴⁶⁾ この主張については、カウフマンやキャメロンが徹底的な批判を加えており、今ではオワウ説が成立する余地はないといっている。しかし所詮は王族たちの話である。一般的にもこれほど髪に対する執着がつかったかどうか、検討する必要がある。

13世紀中ごろになると、間接的ではあるが、一般人も長髪を好んでいたらしいことを示す史料があらわれてくる。⁴⁷⁾ しかし中世初期においては、一般人の髪への執着を示す史料はほとんどない。したがってわずかに残された痕跡から一般人の感性を想像しなければならない。

6世紀初めのブルグント人の世界では、犯罪者や奴隷に髪を作ってやること、つまりかつらを調達してやることは重大な犯罪であったとされている。⁴⁸⁾ 頭髪を失うことは、奴隷や犯罪者となることを意味していたのだ。頭髪を失うことは普通の生活ができなくなることを意味しており、おそらくは生活共同体からの排除が頭髪の喪失の結果だった。髪を切られること自体、手足の切断と同じような一種の拷問と観念されていたとも言われている。⁴⁹⁾ こういう観念が優勢であったところに次第に聖

職者の中にトンスラが普及してくるこの意味を考える必要がある。

グレゴリウスは、ザクセン人が復讐を成し遂げるまで髪を切らないと誓ったことを書き残している。⁵⁰⁾ このメンタリティは、おそらくゲルマン人に共通であったのだろう。だからわざわざこういうエピソードをグレゴリウスが書き記したのだと思われる。また捕まえられたならず者は髪を切られている。⁵¹⁾ さらに髪を切られたがゆえに商売ができなくなった商人についても報告されている。⁵²⁾ これらの記事から読み取れるのは、当時の人々にとって、髪が失われたら、復讐はできず、戦えず、商売ができないということを意味していたことである。そう考えれば、トンスラは、普通の日常生活を拒否する姿であり、復讐や戦争や商売ができない姿になることでもあった。教会というシステムは俗世界を転倒させた世界であるが、その教会に入るために、こうした日常生活や争いごと（商売も駆け引きが基本であり、一種の争いとも考えられる）ができない姿は理想的であっただろう。しかしトンスラをこのように考えるのはあまりにも常識的である。ここでもうひとつのトンスラ論を考えてみたい。

修道院の理念である清貧、貞潔、服従はすべて俗世界の男性性を逆にしたものであり、それこそ教会での男性性を象徴するものだとかつて論じた。⁵³⁾ 俗界で男らしくとされていることを否定しつつ、それを積極的に聖界での男らしさ、つまり真の男らしさへと転倒させていく論理については、ここでは再説しないが、トンスラもおそらくその文脈で考えねばならない。短髪の王たちの時代であっても、頭髪は若さの象徴であり、力があることを、あるいは欲望が枯れていないことを象徴的に

示すものであっただろう。そして若くて力があって欲望が枯れていないことは、社会生活を十全に果たしていくうえで大事なことであった。もちろんトンスラはその否定でありつつ、コロナ型に毛髪を剃り残すことは、天井の王冠をすべての聖職者が頭上におくことによって、聖職者すべてが俗人に対しては王であること、つまり俗人より上に立つことを示しているのだ。トンスラが普及し始めた時期は、女性から政治権力が急速に奪われていきつつあった時期である。つまり王の臣民に対する力は、男の女に対する力であり、それを有している聖職者は、俗人よりも男らしいとされるのである。しかしもしそのような理路で聖職者が男性性を主張しようとするれば、俗人は、その逆に、髪を伸ばすことによって、逆に男性性を主張しようとするはずである。パウロが、髪の長いのは男にとって恥だと聖書の中で断じていても、頭髪がないことをこれ見よがしに、支配者であること、つまり真の男であることの象徴としようとする理路が聖職者にある限り、逆に俗界にある人々は、髪を長くすることによって、自分たちこそ真の男であると主張したくなるはずである。もちろん現実に頭髪を伸ばすかどうかは重要ではない。髪が豊富にあることこそが、男性として好ましいとの観念が存在するようになるはずだと想像しているのである。中世初期においては聖職者が髪なしを選びとり、12世紀以降聖職者中心社会になったときには今度は俗人が髪ありを主張するのだ。

いかなる生物学的必然性もないのに、長髪は女性の頭髪を特徴づけるものであり、騎士物語の騎士たちは、男らしく短髪であったのが一般的だったはずだと我々は考える。ところがいくつかの騎士物語を読んでも、ど

うも長髪こそが男らしさの象徴のような書きようがなされているのである。これはトンスラを考える上で参考になるので、いくつか紹介してみよう。

『ヘルムプレヒト物語』という作品がある。農民の若者が、騎士になり、最後には殺される話である。自分の分をわきまえよという一種の教訓物語である。農民の若者があこがれる騎士は、もちろん本物の騎士ではなく、盗賊騎士に過ぎないのではあるが、しかし身なりだけは騎士であり、それが詳細に記述される。そこで若者が盛んに自慢するのが、長髪の巻き毛なのだ。たとえば「その頭髪はブロンドの巻き毛で／肩越しにふさふさと／豊にのびておりました」⁵⁴⁾とか、「このおれの長いブロンドの／巻きちぢらした髪の毛」⁵⁵⁾という具合なのである。円卓の騎士、ガウェーンが闘うことになる緑の騎士の頭髪は「房々として」⁵⁶⁾いたし、ザイフリート・ヘルブリングでは、体裁だけを繕う、まことに男らしくない輩を、うなじが髪の毛で覆われないで、肌が見えていると表現する。⁵⁷⁾いくつかの騎士物語では騎士らしさ、つまり男らしさの本質的な頭髪のありようは長髪であると示唆されているのだ。本稿を書くために、邦訳のあるいくつかの騎士物語を見ただけなので、騎士が長い髪をもって男らしさのしるしとしていたのかどうか、証明することはできないが、長髪にこだわっていることは見て取ることができる。

聖職者が髪なしにこだわり、それに対して貴族層が長髪にこだわるという図式が成立するならば、貴族層の長髪に対する批判も聖職者から出てくるであろう。パウロの文言がある限り、それは当然の帰結となる。そしてその非難は長髪がめめしさの表れだというもの

であろう。つまり男らしさに欠けているというのだ。実際に探してみると、聖職者の長髪批判はかなり多い。もっとも有名なのは、オルデリクス・ウィタリスであるが、⁵⁸⁾ 彼以外にも、カンタベリ大司教アンセルムス、クレルヴォーのベルナルドゥス、マームズベリのウィリアムが長髪批判の論陣を張り、ルーアン教会会議、ウェストミンスター教会会議などにおいても長髪が刈られるよう命じられたという。⁵⁹⁾ 騎士が戦いに赴く前に頭髪を切ったのは、教会への従順を示し、救いを期待してのことであり、⁶⁰⁾ 巡礼に行く場合も、おそらく長髪のままでは実行しなかったのではなかろうか。

こうしてみると頭髪を長くすることに対する批判が道徳批判とともにマスキュリニティの主張とも絡み合っていることがわかる。要するに、髪の長いのは女性的だと、聖職者は批判するのである。髪は短ければ短いほど男性的だという主張がその底に流れている。ところが騎士＝俗界支配層は、結婚できず、戦えない聖職者を女性的だと考えており、聖職者の身なりからできるだけ遠いほうが男性的だと考える。頭髪で言えば、長ければ長いほど男性的だということになる。つまり聖職者たちと俗界の支配者の間の男らしさをめぐる戦いのシンボルが頭髪の長さなのであった。

さてしかし以上述べたことには史料的な裏づけがない。まったくの思いつきに過ぎない。史料を探して、頭髪をめぐっての、俗界と聖界の闘いを論じるのは他日を期すしかない。

おわりに

本稿は、頭髪をテーマとして、ハゲ論を書く予定であった。ところが現代のハゲ論という本筋に入る前に、紙幅の余裕がなくなった。

ハゲを男らしさの象徴としようとした中世の聖職者には、現代日本のかつら会社の隆盛は想像できなかつたに違いない。では我々の社会と中世の世俗社会は、ことハゲ観に関しては、そんなに違っていたのであろうか。次稿はそのあたりをテーマに考えてみたい。

注

- 1) Reinhard Lebe, *War Karl der Kahle wirklich kahl? Historische Beinamen – und was dahintersteckt*. Fischer Taschen Verlag, 1982.
- 2) *Ibid.*, p.31.
- 3) *Ibid.*
- 4) *Ibid.*, p.32.
- 5) *Ibid.*, p.33.
- 6) Janet Nelson, *Charles the Bald*, Longman, 1992, p.13.
- 7) エインハルドゥス、ノトケルス著、国原吉之助訳・註『カルロス大帝伝』筑摩書房、1988年、33頁（Ⅲ22）。
- 8) Walter Pohl, “Telling the Difference: Signs of Ethnic Identity,” *Strategies of Distinction. The Construction of Ethnic Communities, 300-800*, ed. by Walter Pohl, Brill, 1998, p.52,
- 9) Jean Hoyoux, “Reges criniti: chevelures, tonsures et scalps chez les Mérovingiens,” *Revue belge de philologie et d’histoire*, 26 (1948) p.479f.
- 10) トゥールのグレゴリウス著 杉本正俊訳『フランク史:10巻の歴史』新評論 2007年、303頁（Ⅵ24）。原文では、「ut regum istorum mos estその王たちの習慣であるように」（兼岩正夫・臺幸夫訳註『トゥールのグレゴリウス 歴史十巻（フランク史）Ⅱ』東海大学出版会、1977年、52頁）という言葉が入っている。
- 11) 同書、398頁以下（Ⅷ10）。
- 12) 同書、125頁以下（Ⅲ18）。
- 13) Averil Cameron, “How Did the Merovingian Kings Wear Their Hair?” *Revue belge de philologie et d’histoire*, 43 (1965), p.1209.
- 14) マルク・ブロック著、井上泰男・渡邊昌美訳『王の奇跡』刀水書房、1998年、58頁。
- 15) Percy Ernst Schramm, *Herrschaftszeichen und Staatssymbolik*, Bd.1,1954, Hiersemann Verlag, p.125.
- 16) Ekkehard Kaufmann, „Über das Scheren abgesetzter Merowingerkönige“, *Zeitschrift für Rechtsgeschichte. Germ.Abt.* LXXII (1955), p.177.
- 17) J. M. Wallace-Hadrill, *The Long-Haired Kings*, University of Toronto Press, 1982, p.156.
- 18) Maximilian Diesenberger, “Hair, Sacrality and Symbolic Capital in the Frankish Kingdom,” *The Construction of Communities in the Early Middle Ages: Texts, Resources and Artefacts*. ed. by Richard Corradini, Max Diesenberger, and Helmut Reimitz, Brill, 2003, p.181f.
- 19) *Ibid.*, p.182.
- 20) Wallace-Hadrill, *op.cit.*, p.151ff.
- 21) 筆者にとって都合が悪いことなのだが、エイモリは古代ローマの末期には長髪は普通に見られ、メロヴィング期の長髪は、むしろ皇帝への軍事サービスの結果だと考えたほうがいいかもしれないと想像している。（Patrick Amory, *People and Identity in Ostrogothic Italy, 489-554*, Cambridge University Press,1997, p. 345ff.）。ローマ末期における軍団内の頭髪状況については、もう一度、きっちり史料的に整理するべきであろう。ただし一般的にローマ人が長髪を軽蔑していたことは多くの歴史家が認めており、筆者の主張が根拠を失うことはないだろう。
- 22) グレゴリウス、前掲書、98頁（Ⅱ41）。
- 23) Paul Edward Dutton, *Charlemagne’s Mustache and Other Cultural Cluster of a Dark Age*, Palgrave Macmillan 2008, p.22.
- 24) エインハルドゥス、前掲書、8頁（Ⅰ1）。
- 25) たとえばグレゴリウス、前掲書、214頁（Ⅴ14）。
- 26) Dutton, *op.cit.*, p.23.
- 27) *Ibid.*, p.38.
- 28) Ildar H. Garipzanov, “The Image of a Ruler And Roman Imperial Tradition,” *Early Medieval Europe*, 8 (1999), p.213.

カール禿頭王は本当に禿げていたか

- 29) Paul the Deacon, *History of the Lombards*, trans. by William Dudley Foulke, ed. by Edward Peters, University of Pennsylvania Press, 2003. p.296.
- 30) この間の事情については、Jürg W. Busch, "Vom Attentat zur Opponenten der frühen Karolinger," *Historische Zeitschrift*, 263 (1996), p.565f. なおメロヴィング朝期の簡単な歴史を知るためには、レジーヌ・ル・ジャン著 加納修訳『メロヴィング朝』白水社、2009年が簡便で役に立つ。
- 31) Dutton, *op.cit.*, p.21.
- 32) ノトケルス『カルロス大帝業績録』（『カルロス大帝伝』所収）、135頁（Ⅱ12）。
- 33) 同書、142頁以下（Ⅱ15）。
- 34) *Ibid.*, p.22.
- 35) *Ibid.*, p.23.
- 36) Robert Mills, "The Signification of the Tonsure," *Holiness and Masculinity in the Middle Ages*, ed. by P.H. Cullum and Katherine J. Lewis. University of Wales Press, 2005.
- 37) Dutton, *op.cit.*, p.37.
- 38) *Ibid.*, p.36.
- 39) ヤコブス・デ・ウォラギネ著、前田敬作、今村孝訳『黄金伝説』1～4、人文書院、1979-1987年、第1巻、421頁以下。
- 40) 士師記、16：16。
- 41) エレミア書、7：29。
- 42) レヴィ記、21：5。
- 43) ミカ書、1：16。
- 44) コリントの信徒への手紙 一、11：14。
- 45) グレゴリウス、125頁以下（Ⅲ18）。
- 46) Hoyoux, *op.cit.*, pp.488 and 507.
- 47) Pax Bawarica, 71では、rusticusは髪を切るようにと命じられている。MGH, *Const.* 2, p.577.
- 48) Edward James, "Bede and the Tonsure Question," *Peritia*, 3 (1984), p.92.
- 49) Dutton, *op.cit.*, p.16.
- 50) グレゴリウス、前掲書、220頁（V15）。
- 51) 同書、531頁（X15）。
- 52) 同書、368頁（VII31）。
- 53) 拙稿「ヨーロッパ中世における聖職者のマスキュリニティ」『埼玉学園大学紀要 人文学部篇』第7号（2007年）。
- 54) ヴェルンヘル・ガルテネーレ作、浜崎長寿訳『ヘルムブレヒト物語』三修社、1970年、3頁。
- 55) 同書、25頁。
- 56) 瀬谷廣一訳『ガウェーンと緑の騎士』木魂社、1990年、19頁。
- 57) 平尾浩三訳『ザイフリート・ヘルブリング』郁文堂、1990年、32頁。
- 58) Ordalic Vitalis, *Historia ecclesiastica*, ed. and tr. Marjorie Chibnall (6 vols, Oxford, 1968-80) IV, 186-90.
- 59) Robert Bartlett, "Symbolic Meanings of Hair in the Middle Ages," *Transactions of the Royal Historical Society*, Sixth Series 4 (1994), p.50f.
- 60) *Ibid.*, p.52f.